

3. サッカーファンがもたらしたもの

- 2002FIFAW 杯をめぐるサポーター・ボランティアグループの活動 -

坂 なつこ

はじめに

2002年 FIFA（国際サッカー連盟）ワールドカップは、アジア地区ではじめての開催であり、そして史上初めての日韓共同開催となった。日韓関係の緊張、「フーリガン」対策、チケット問題など、開幕前は様々な問題を抱えていた本大会であったが、日本 - ロシア戦が視聴率 66.1% をとり、各地のパブリックビューイングが満員となるなど、日本中がワールドカップに沸いた一ヶ月であった。

しかし、「にわかサッカーファン」が社会現象となるなど、このような「ワールドカップ・フィーバー」は大会前には予想できないものだったのではないだろうか。だが、この盛り上がりの裏では、各開催都市のサポーター・ボランティアグループの活躍があった。彼らの多くは、「ボランティア大会」といわれた 98 年フランス大会を経験し、日韓大会を市民の力で盛り上げようと長く様々な準備をしてきたのであった。日本組織委員会（JAWOC）ボランティアへの応募も多く、その意味で 2002 年日韓大会は第二のボランティア大会であり、「サポーター大会」と呼ぶことができるだろう。

このようなサポーター・ボランティアグループの活動は、いったいどのような意味を持つものなのだろうか。彼らは従来の熱心な「スポーツファン」とどう違うのか。本稿では、紙幅の許す限りで、2000 年から調査している各開催都市や首都圏のサポーター・ボランティアグループについてその一部を示し、彼らの活動が日本のスポーツの場や社会においてどのような意味と展望を持ちうるのかを検討する¹⁾。

1. 日本の構造転換と Jリーグの誕生

日本においてスポーツは、教育システムとその価値に強く関係づけられてきた。スポーツの現場が主として学校（部活動）であり、主管官庁が文部省（現文部科学省）だったこととあわせて、スポーツは教育との結びつきを強くイメージされ続けたといえる。スポーツの体系は、概してこの関係に基礎づけられており、地方の諸種目の協会や連盟、学校が伝統的なシステムを形成してきた。そのような日本のシステムは、権威の保持を「トップダウン」方式によって維持され続けてきたといえる²⁾。

このような日本的システムが変換していくのは、1980 年代ごろと推測される。1980 年代におきた日本社会の政治的、経済的な構造転換は、新自由主義を基軸にした新しい国家の枠組みを構築しようとするものであった³⁾。ここにおいてスポーツやレジャーといった余暇活動は、新しい統合形式のなかに定位され、文化装置としての重要な位置を占めるようになる。1990 年代における文部省以外の官庁によるスポーツ産業への積極的な参入、とりわけ、『スポーツビジョン 21』（通商産業省 [現経済産業省] 政策局 [通商産業調査]）1990 年）は、スポーツと教育のイデオロギーを分離させる上で重要であり、スポーツは、産業、メディアにおける新しいコンテンツへと変化するのである。さらに『スポーツビジョン 21』で重視されたのは、スポーツ産業の振興と地域の活性化であり、そこでのキーワードは「地域」であったといえるだろう⁴⁾。

J. ドゥフランスと C. H. ポシエロは、1960 年代から 80 年代のフランスにおいて、スポーツの場は、教育やスポーツ連盟の同盟と正統性から、レ

ジャー産業と人びとの自由な余暇活用との同盟へと、その基軸が転換し、それに従ってスポーツのイメージや付与される価値観が変化したことを「状況の反転（a reversal of the situation）」と呼んでおり、このような事態が日本の80年代においても生じたと考えられる⁵⁾。

Jリーグは、まさにこのような状況の中で開幕したのである。

2. Jリーグの「新しさ」 - 「百年構想」

1993年に始まったJリーグは、地域密着型を掲げ、ヨーロッパとりわけドイツのクラブシステムをモデルとしていた(1999年からは2ディビジョン制)。Jリーグは、それによって「地域に根差したスポーツ文化」の普及を目指すものであり、地域住民との相互交流を基盤としているといえる。このようなあり方は、学校を中心とした日本の従来のスポーツとは異なったものであった。

サッカーは、読売クラブなど、すでにクラブシステムが存在しており、教育システムの諸価値との結びつきは、相対的に薄かったといえる。そのためJリーグはコマーシャル・セクターと結びつくことが容易であり、当初からメディアコンテンツの供給のポテンシャルを持ち続けていたといえる⁶⁾。

伝統的な日本のスポーツの価値から離れた距離を持っていたサッカーでは、ファンもまた、別な様相を見せる。ゲーム観戦をする、あるいはプレイをするというファンがいる一方で、従来の枠組みを越えるファンが登場してくるのである。そして彼らが共感するのがJリーグの理念「百年構想」であった。

「百年構想」は、「『地域に根差したスポーツクラブ』ができることで、人々がともにスポーツに親しみ、世代を超えた交流を広げ、豊かな人生を過ごしていけるものと考えています。『Jリーグ百年構想』は、スポーツを核とした地域交流の場づくりであり、またこの理念をより多くの人と共有し、実現していこうという活動そのものでも

あります」と、その理念を示している(『Jリーグ百年構想 スポーツで、もっと、幸せな国へ。』)。このような理念を実行するために、ホームタウン制がJリーグ参加の条件の一つとなっており、地域と一体となったクラブづくりとともに、サッカーに限定されないスポーツ振興が目的とされ、それによる地域の活性化が目指されるのである。このような高い理念にサッカーサポーターたちは共感し、実現しようとする。そのような彼らの活動は、ゲーム観戦という従来のファン行動の枠を越えて、様々に自発的な(その意味でボランティアの)活動へと広がっていくのである。

3. サポーター・ボランティアグループの活動

このような活動をするサポーター・ボランティアグループには、大別すると、Jリーグのチームがある地域を活動の拠点としているものと、首都圏を中心に全国的な動きをするものがある。

地域を基盤にしている「アライアンス 2002」(新潟・NPO 団体)の場合、その事業は、Jリーグあるいは日本代表の応援(観戦)、Jリーグ運営ボランティア、フットサルの定期開催、障害者サッカーとの連携・ボランティア、地元商店街との連携によるイベント、月例会などの開催、情報発信・ホームページ運営など、多岐にわたっており、高い企画力と運営力が見られる。

全国を射程にしている日本サポーター協会(NPO 団体)では、同様にホームページ運営、シンポジウム、講演会の開催など、意見交換、情報交換的な活動が多く、また全国的なサポーター・ボランティアグループのネットワーク形成を積極的に行っている。なかでも「トークライブ」と呼ばれる展示・講演会は、いくつかのワールドカップ開催地委員会から招聘されており、各地域のサポーターたちにとってモデルを示すという面も持ちうる。また、ワールドカップ期間中には、ホームページ上で、開催都市やスタジアム周辺の情報を各国語で提供するなどしている。

また、「サロン 2002」は、より研究的側面が強

いグループであるといえる。月例会のいくつかのテーマを示すと、「出張サロン in 清水、スポーツが大好きな子供たちを育てよう - プロを目指す子供たちと地域で楽しみたい子供たちのために何ができるか?」「コンフェデレーションズカップを振り返って - 運営の立場から」「ユースサッカーは変わるか? - DUO リーグのあゆみと東京都ユースリーグの展望及び学校運動部のクラブ化について」「サッカーTV を斬る - サッカーファンの開拓に TV はどう貢献できるか」「サロン 2002 のホームページをどう活かすか」などがある。

テーマはサッカーを主軸としながらも、様々な領域から専門家や行政職員にいたるまで報告がなされており、中には政策提言に近いものもみられる。

各グループのいずれにも共通するのは、月例会やシンポジウムなどの開催であり、これが学習課程としての機能を果たしている点である。A. メルッチは、学習会は自分たちの活動を自己再帰的にモデル化すると指摘する⁷⁾。そのことが、活動自体に重要な意味と特徴を与えるのである。グループ自体が多様な主体から構成されるネットワークであり、学習会によるやりとりやその結果をとおして、新しい文化モデルや新しい関係諸形式の実験と実践が行われる。このようなモデル化は、固定的なものではなく学習課程において柔軟性を持ち、運動自体の自己再帰性が確保される場となる。運動が情報の交換・循環システムであり、情報の読みかえや創造が生まれ、運動自体が「文化の実験室」としての場となるのである。さらに、ここでの議論や情報はホームページなどで公開されることで、従来のスポーツ組織の「トップダウン」的な意志決定システムとは異なる、よりオープンな批評空間での意見交換やネットワーク形成を可能としている。

4. 「新しい社会運動」か?

このような動きは、サッカーだけに限らず、市場のグローバル化の進展と国民国家の枠組みが揺

らぐなかで顕在化する、さまざまな現象の一つに位置づけられうる。斉藤日出治が述べるように、それらは「市場取引のグローバル化や国家間関係の緊密化に伴う地球規模での人びとの結びつきを背景にして、未知の、遠方の人びとに対する連帯と責任の感覚に裏打ちされている」市民運動のかたちと重なり合うといえる⁸⁾。そこでは、「権威による命令でも、伝統的な義務によるのではなく、人びとが共通の課題（芸術、教育、健康、安全、自治問題など）を軸として自発的に結集し、その解決に取り組むボランティア運動」が、展開されるのである。市民社会の活動は、政府の権力と市場の利潤追求の動きに対抗しながら、新しい公共的な関係を築こうとする動きを見せる。たとえば環境運動、女性運動など、グローバルなネットワークを形成し、国家にかわる、グローバルな社会統合の役割を担っていくのであり、市民社会の多元的ネットワークがはぐくまれる。これらの動きは「グローバルでもあれば、ローカルでもあり、自然発生的でもあれば組織的」でもあり、「精神的、宗教的、経済的、道徳的、政治的」に多様な、運動の源泉を持つものである。

メルッチは、「現代の社会運動は、過去における運動以上に、日常生活における自己実現の必要などの非政治的分野に向けてシフトしている」と述べる⁹⁾。「この点において社会運動は、紛争的かつ敵対的であるが、政治的志向は持っていない。それらの運動は、文化的理由に基づいて複合システムの論理に挑戦しているからである」とし、「新しい社会運動」と呼ぶ。サッカーのサポーター・ボランティアの動向は、このようなメルッチの指摘と重なり合う。それはスポーツの場においてと同様に、様々な地域社会のネットワークを媒介にした、生活世界と結びついた運動という特徴のいくつかを見出すことができるからである。

5. 「アフターワールドカップ」 - まつりのあと

スポーツの場はグローバル化の渦中に存在し、市場論理に強く突き動かされている¹⁰⁾。

他方で、このことにより国家とスポーツとの直接的な結合は薄れ、ナショナルとスポーツとの結びつきかたは複雑に変容してきているといえる。とりわけ、サッカーは、オリンピック・スポーツとも距離を置き、グローバルメディアの再編過程と結びついており、この傾向は顕著であることが指摘されている¹¹⁾。サッカーのサポーター・ボランティアグループの動きは、このような諸相と関連しながらあらわれてきたといえるのである。

さて、「ワールドカップ」というイベントがなくなった今、これらのグループの諸活動はどのような方向へと向かうのだろうか。一つの事例として「キックラブ」（宮城）があげられる。ワールドカップの終了した7月21日、キックラブ代表、日本サポーター協会代表、JAWOC ボランティア経験者（埼玉、横浜）らによる「まつりのあと - 宮城スタジアムとまちづくり」と題したシンポジウムが開催された（仙台市）。キックラブはワールドカップのために宮城県推進委員会のよびかけにより組織された、いわば行政主体の「市民グループ」である。今後は市民グループ「キックラブアクティブ」として活動することとなり、スポーツボランティアを中心に NPO 化も検討されている。行政からの支援を離れて、どのようなあり方を示していくかが注目される。

ワールドカップ終了後の J リーグ観客動員数は、開幕前と比べ増加がみられた。サッカーファンの拡大という意味で「ワールドカップ効果」は続いているように見える。しかし、このような「効果」は、サッカーファンの広がりだけなのか、あるいはサポーター・ボランティア活動が、新しいスポーツの場を形成し、市民社会における「市場とも政府とも異なる第三の公共性」の形成を促す動きとなるのが、今後の焦点となるであろう。

サッカーというスポーツを柱として、緩やかな連帯を保ちつつ、様々な方向へと広がっていくようなサポーターたちの活動には、「差異と多様性の相互承認」を可能とするコスモポリタニズムの端緒があらわれているように思われる。そこに、偏狭なナショナリズムや市場の暴走を克服し、

「根元的な民主主義」へとすすむ契機がはらんでいるといえるのではないだろうか¹²⁾。

注・参考文献

- 1) なお、本稿は、立命館大学ワールドカップ調査の一部であり、次の論文を下敷きにしている。T. Yamashita/ N. Saka, 'Another Kick Off; World Cup 2002 and Soccer Voluntary Groups as a New Social Movement', *Japan, Korea and the 2002 World Cup*, J. Horne/ W. Manzenreiter [eds.], Routledge, 2002. 坂なつこ「サッカーファンは社会を変えるか - 調査中間報告：視点と仮説」『立命館大学人文科学研究所紀要』No. 79、2002年。
- 2) 中島信博「地域社会からみた J リーグ - 市民レベルでの交流の可能性」『変容する現代社会とスポーツ』日本スポーツ社会学会 [編]、世界思想社、1998年。
- 3) D. ジェリー/ 清野正義他編著『スポーツ・レジャー社会学 オルターナティブの現在』道徳書院、1995年。
- 4) 人々の意識の変化については平成 12 年『国民生活に関する世論調査』（総理府 [現内閣府]）。平成 12 年度国民生活白書「ボランティアが深める好縁」平成 12 年 11 月、経済企画庁。
- 5) J. ドゥフランス/ C. H. ポシエロ（山下高行・坂なつこ訳）「フランスから：スポーツという「場」の構造と転換（1960-1990） - 『機能的』、歴史的、予測的分析試論 - 」『変容する現代社会とスポーツ』日本スポーツ社会学会 [編]、世界思想社、1998年。
- 6) 糺正勝『J リーグのスポーツ改革』ほんの木、1994年。
- 7) A. メルッチ（山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かずみ訳）『現在に生きる遊牧民 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、1997年。
- 8) 斉藤日出治『国家を越える市民社会 - 動員の世紀からノマドの世紀へ』現代企画社、1998年。
- 9) メルッチ、前掲書。
- 10) 山下高行「2002FIFA ワールドカップとサッカーサポーター活動」『日本の科学者』Vol. 37、No. 7、2002年。
- 11) 山下、同上書。しかし、スポーツとナショナルとの関連には十分な検証が必要であろう。たとえば、大島信三「お雇いサッカー監督が救った日本人の愛国心」『正論』2002年8号など参照のこと。
- 12) 山下高行「グローバル化とスポーツ」『近代ヨーロッパ探求 スポーツ』有賀郁敏他著、ミネルヴァ書房、2002年。E. ラクロー/ C. ムフ（山崎カラル・石澤武訳）『ポスト・マルクス主義と政治 根源的民主主義のために』大村書店、1992年。

[ホームページ]

J リーグ：<http://www.j-league.or.jp>

アライアンス 2002：

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/qa2/tag/HOME PAGE.html>

日本サポーター協会：<http://www.jsa-npo.or.jp/>

サロン 2002：<http://www.salon2002.net/>

キックラブアクティブ：<http://www.c-marinet.ne.jp/~kaz/>